

トロントから～HOPE（希望）パート1

カナダ東部にあるトロント市は、五大湖の一つオンタリオ湖の北西に位置し、経済そして文化などの面においてカナダ最大の都市です。かつて世界一の高さを誇ったランドマークであるCNタワーや、トロント・メイプルリーフス（NHLホッケーチーム）、そして北米最大の映画祭であるトロント国際映画祭など、観光やスポーツ界、エンターテインメントでも世界的に注目を集めています。また、移民の国であるカナダの中で、最も多くの人種が共存する国際色豊かな世界都市としても有名です。今回そのトロントから、夢と希望を抱いて移民して来た人々が通う英語学校の皆さんによる、HOPE（希望）のエッセイを紹介します。

私の希望～Jun Tian - 中国

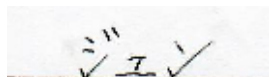
幼い頃「世界の不思議」という写真集を見ました。中でも万里の長城、ナイアガラの滝、富士山、そしてピラミッドが大変印象深く、初めて目にした時、これら偉大な遺物が、自然あるいは人間の手によって創られたことに心の底から感動しました。そして、将来必ずこれらを見に行くことを決心したのです。

万里の長城の頂上に登ったのは、ある夏の雨が降っていた朝でした。肉眼で見る限り城壁がうねりながら限りなく続き、自分がとても小さく感じました。同時に、この古代の歴史と美しさを目の前にして言葉を失いました。写真で見たのとは少し違っていました。霧雨の中そびえ立つ姿は本当にすばらしかったです。カナダに来てから、ナイアガラの滝には何度も行きました。それは、本当に自然の産物であり、初めて見た時は思わず息をのみ、何時間も見とれていました。



初めて富士山を見たのは1996年の春、霧のかかった朝でした。新幹線から見えたらという私の希望は、富士山に近づいた時叶ったのです。雲の隙間から突然太陽が現れ、私の視界にその雄姿が飛び込んできました。それは正に尊厳で、ほんの数分だけでしたが、その瞬間は私の心に今でもはっきりと残っています。ピラミッドは未だ見る機会はありませんが、いつかエジプトに行きたいという希望を持っています。

世界には本当にすばらしい遺産が沢山あります。私はいつも夢を実現する機会を与えてくれた神に感謝し、どこに住んでいようと希望を持ち続けていれば、必ずいつか幼少に写真集で見た「世界の不思議」をすべてこの目で見れると信じています。

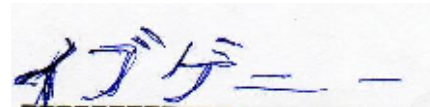




私の家族の希望

Evegary Fedenev -ロシア

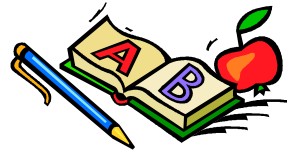
まず第一に、私たちは何が希望か決めなければなりません。私は2つのタイプの希望があると思います。ある人にとって希望は前向きな変化を期待するもの。彼らは人生を変えたいと希望しますが、実際には何もしません。一方、ある人にとって希望は人生のゴールです。彼らは希望を叶えるために一生懸命に行動します。加えて、彼らは決して諦めません。なぜなら、もし諦めたら、そこで全てが終わるからです。私の場合、人生を変えたいと希望し、家族で3年前にカナダに移住しました。もちろん、子供たちにも安全で明るい将来を期待して。カナダに来た時は、とにかく懸命に働かなければなりません。そして私たちの希望は今、人生のゴールに変わりました。現在、夫婦で共に働きながら勉学に励み、人生のゴールを達成するという希望を抱いて最善を尽くしています。私は2週間前に短大で警察官の養成プログラムを修了しました。私のゴールは警察官になることです。また、私の弱点である英語力を改善するために ESL 学校にも通っています。私の妻はホノグラフィアーとして働きながら、医師になるというゴールのため資格取得に向け勉強をしています。今、私たち2人の希望は近い将来必ず実現すると信じてます。



かけがえのない笑顔 Jamie Oh-韓国



大惨事に遭った時、希望を見出すのは難しい。では、希望とは何か？私の体験談を紹介します。2004年スリランカを襲った記録的な大津波の1年後、私は服飾企業GAP(ギャップ)・韓国支店の従業員ボランティアとして、現地で住居を失った人々のために家を建設するという奉仕活動をしていました。2週間の滞在中、私はそれまでに経験したことのない、人を助けるという、すばらしい機会を与えられました。滞在スケジュールは、毎朝5時半に起床し建築現場に7時半到着。それから8時ちょうどに作業を開始し夕刻5時半まで働きます。そこは、大きな波が全てを破壊し、建物の骨組みだけが残っていました。3～4人が1チームとして働き、居間のひび割れた床を剥がし、セメントを流し込んで新しい平らな床を作りました。他の者は家の外壁をペンキで塗り、また他の者は組み立てを担当しました。地元の人々は靴も履かず、また、照りつける太陽をしのぐ適切な避難所もなく、我々の作業を木陰に座って見ていました。しかし、人々は決して不満を言いません。私たちはとても気の毒に思い、懸命に働きました。ある猛暑の日、着ていたシャツが重労働のため汗でびしょ濡れ、同僚と私は喉がカラカラ。それを見た一人の村人が、突然木に登りココナツ2つを私たちのために採ってきてくれました。そのジュースの冷たくて甘いおいしさといったら！労働中、私はいつも村人たちの笑顔と笑い声を目にしました。もちろん、ココナツをくれた男性の顔にも笑みが、傍にいた若く綺麗な彼の娘さんにもステキな笑顔が。私は彼らの中に希望を見つけました。かけがえのない、その輝く笑顔を持ち続けていれば、必ずや、この悲惨な状況を乗り越えられるということを私に教えてくれたのです。



私の夢



ARZU-トルコ

私は、ずっと前から英語が堪能になりたいという夢がありました。ある日、インターネットで世界の情報を見ていると突然、「カナダの移民プログラム」に目が留まりました。特に「カナダの憲法第15条では、いかなる個人も人種、国籍、民族、肌の色、宗教、性別、肉体的・精神的障害の有無によって差別を受けず、法の下では皆平等であると謳われています。この原則はカナダ社会のあらゆる側面において徹底しており、カナダが国際社会に対して最も誇りにしている点でもあります。」と書かれていました。さらに、カナダの医療制度、学校、教育制度、優れた健康保険制度など教育や医療レベルは、米国、英国等と並んで最高水準と評価されていました。もっとも関心を持ったのは、カナダは英語の国であることでした。

幸いに、私は4ヶ国語が出来ますが、英語を学び、PH. D論文を英語で書いて、中央アジアの歴史や仏教文化を世界にもっと広げたい、一人でも多くの人々に知ってもらいたいというのが、私の人生における目的の一つでした。そこで私はカナダへ移住することを考え、家族と相談した上、早速カナダへ技術移民の申請書を出しました。まるで来月でも移住できるような気持ちになっていました。それと共に英語を独学し始めました。

毎日、基本的な構文や単語を暗記し、文法や根本的原則を一生懸命努力していましたが、効果はあまりありませんでした。自分が言いたいことは何とか表現できましたが、相手が何を言っているのかは全然わかりませんでした。それは、一つは、学んだものを使う環境がなかったからでしょう。もう一つは、言葉は目で学ぶことではなく、耳で学ぶことが大事であるからです。

学問に王道なし。

結局、そのようにして申請してから3年も過ぎました。カナダから何の連絡もなかったし、私たちのカナダへの移住は叶いそうもありませんでした。その上、私の英語は少ししか上達していませんでした。それでも、カナダへ移住することと英語の勉強は諦めませんでした。

夢があれば道がある。自信があれば成功がある。成功があれば将来がある。

そのうちに、嬉しいニュースが舞い込んできて夢が叶いました。カナダへ移住することができたのです。移住してから、自分で学んできた土台を元にして、短期間で、耳が日常英語に慣れてきました。その結果正しい英語を話せるようになりました。それは、言葉を学ぶには目より耳、暗

記より体で覚えることが大事。暗記力よりも、体で覚えたものは絶対に忘れない。習うより慣れる。いくら絶望に落ち入っても、少しでも希望の輝きを持ち続けることが大事だなと思いました。もちろん、世の中は自分の思い通りにはなりません。しかし、希望と共に生きることは人間にしかできない。だから、生きている限り希望を持つことが大事です。

Plus



希望による前進

Lynda Chubak—カナダ (クラス担任)

マーガレット・ミッチェル（「風と共に去りぬ」原作者）は“人生は思った通りにならない”と的確に表現しました。彼女の率直な意見は、我々が欲するものを手に入れるためには、自ら努力しなければならないという、私の信念を強くしました。しかしながら、それは希望が持つ大きな力にはかないません。私にとって希望とは、不可能と思える夢を追うための、あるいは、無理だと思うことに挑戦して打ち勝つための動機付け、いわば発動機です。希望を抱くことによって我々は、自分でイメージした現実を手に入れたり、楽観的になって想像以上のエネルギーを引き出しています。時には突かれながら、また時には強く押されながら、様々な曲がりくねった人生の道を、また、描いた夢から望んだ目的地までの根気の要る人生の旅をしながら、希望が我々を前進させてくれるのです。



リンダ



日本大好き



子供の頃の夢

Winnie Law-カナダ HELLO KITTY



幼い頃“ハロー・キティー”の人形を貰った時に、初めて日本に興味を持ちました。私はキティーちゃんに一目惚れし、キティーちゃんグッズを集め始めました。今でもキティーちゃんは私のお気に入りです。彼女を見るたびに幸せを感じています。

私の日本への関心は、日本のポップカルチャーに出会った時により強くなりました。高校時代、クラスメイトのキミと日本文化、最新の芸能ゴシップなど頻繁に話したり、ハンサムな日本人アイドルに憧れたものです。その頃、私は密かにいつか日本に住みたいと願っていました。

大学では日本語を専攻しませんでした。1年目に日本の歴史について学ぶ機会がありました。日本についての知識は、高校時代ランチタイムの友人キミとおしゃべりから始まり、この大学時代に、いかに日本が国家として形成されたか、また、歴史上の偉大な人物や出来事などの学習にまで至りました。私のクラスに、いつも一番前の席に座る80代の女性がいました。おそらく日系3世か4世であろう彼女が、真剣に学ぶ姿を見て胸が熱くなったのを覚えています。

大学最終学年の時、JETプログラム(語学指導等を行う外国青年招致事業)の募集を知り、日本に行く夢を実現するチャンスだと思い応募しました。見事、面接試験に合格し、大学卒業後すぐに広島県福山市に派遣されました。福山市での経験はとてすばらしく、日本語だけではなく陶芸、日本太鼓などを学びました。何と言っても、多くの日本人の友人ができ今でも連絡を取り合っているのは、私にとってかけがえのないことです。

JETプログラムを終了しカナダに帰国した後も、東京に住みたいという願望が強くなり、5年後に東京の企業で英語教師として働くべく再度、日本を訪問しました。東京でのダイナミックでエネルギー溢れる人々との出会いは、私に新たな経験と機会を与えてくれました。

東京での4年間はあっという間でしたが、今は教育学部の修士課程で学び、卒業後に日本の大学か短大で教師として職につくことを目指して、日夜勉学に励んでいます。

自分でも何故こんなに日本に惹かれるのか分かりませんが、私は日本にいととも心が安らぐのです。美味しい食べ物、美しい景色、そして親切で慈悲深い日本人。子供の頃の夢を叶えた人は、そんなに多くいないと思いますが、私は幾度も夢を実現したことを誇りに思います。来年必ず日本に戻る、これが私の現在の希望です。



ウニ



トロントから～HOPE (希望) パート2



ミリー

私の希望 Mylie - ベトナム

私の希望はたくさんありますが、その中の幾つかは既に叶えました。仕事を見つけるという最初の希望は、良い収入と条件に恵まれて、カナダに来た時に達成しました。次に家を持つということも。現在の希望は、息子が大学を修了し良い仕事に就いてくれることです。

その他は世界の平和。皆が飢餓に苦しむことなく、戦争のない世界を願っています。また H5N1 のような病気、地震や津波などの自然災害が起こらないこと。

1989年のサンフランシスコとオークランドで起きたM7の地震のことは、未だに忘れることが出来ません。オークランド橋が崩壊し、多くの人々が亡くなりました。当時、私の家族はオークランドの近くに住んでおり、母がプールサイドから水中に落ちそうになるほど地面が揺れました。兄はスーパーマーケットの外にいましたが、道路の街灯が大きく揺れるのを見たそうです。そして、恐怖のあまり身動きできなかつたとのことでした。

希望というものは、努力すれば叶うと信じています。人間がコントロールできない自然災害でも、いつの日か技術が進歩し、科学者や気象学者たちによって防げる時代がくればと願っています。



ユラソタ



HOPE Jolanta - ポーランド

カナダに来た時、私はとても幸せでした。なんて美しく、多くのチャンスを与えてくれる国なんだろうと感動したものです。しかし日が経つにつれ、満たされない自分に気づきました。自国では愛する家族や友人に囲まれて心的に幸せだったのに、この国では孤独。そんな自分が惨めになり腹が立ちました。私は社会的ではありませんが、人は外に出かけて楽しい時を過ごしたり、意見を交換したり、日常の事を話したりする友人が必要です。そして、自己憐憫の数ヵ月後、私は‘友人を作る’と決心し、希望を持って ESL プログラムに通う事にしました。その結果、とてもフレンドリーな人達と出会い、数人の友人ができました。希望は困難な時ほど人間を強くします。

‘HOPE－希望‘とは－

あなたが不幸だと感じる時、日常の小さな幸せを探して見てください。そうすれば、今日一日がとても幸福に感じるでしょう。希望は奇跡をもたらします。あなたが希望を持てば、もっと幸せを感じるし、幸せに感じれば、もっともっと希望が持てる。そして、希望は目的を達成させるために、あなたに強さと行動力を与えます。

私は今、自分の将来が楽しみです。なぜなら‘人生とは勝つか負けるかではなく、いかに希望をもって楽しむか‘と言う事に気づいたからです。



ツツリア



My Hope and Faith Cecilia Paraiso - フィリピン

‘どんな深い悲しみと苦悩の中でさえ、私たちは希望を失ってはいけない。信念を変えてはいけない。神の教えに背いてはいけない。‘

私は母国に家族を残して、4年間香港の私設老人ホームで看護の仕事をしました。当初、まったく異なる宗教、文化を持つ外国人と一緒に働くことは非常に困難でした。例えば、聖歌隊メンバーとしての責務のため、仕事のスケジュールを調整したいことを申し出ても理解してもらえなかったりなど。しかし、いつも神の御心により、なんとか礼拝での勤めは果してきました。その後幸運にも、私の仕事に対する真摯な態度と成果により、しだいに同僚からは尊敬を、雇い主からは賞賛と信頼を得るまでになりました。しかし、成功を夢見て香港に来たのに、それは叶いませんでした。その時、子供を母国に残すという犠牲を払ってまで富を追うことの過ちに気づいたのです。神がすべての者を幸福に導くという教えのもと、私は家族にとって本当の幸せとは何かを悟りました。そして、香港での最後の契約期間を終了した後、私の人生において優先すべき事を決め、今度は家族全員でカナダに移住しました。この決断は間違いでなかったと思うと同時に、聖歌隊として教会での務めを果たしながら、自分の信じるものを見失わないようにと心に誓っています。

希望がすべて Judy - コロンビア

HOPE(希望)という言葉は、私の人生においてすべてを意味します。

私は犯罪の多い国、コロンビア出身です。私の妹は2002年2月に誘拐され、未だに発見されていません。妹の消息は以前分からず、私の国の現状からすると生存確率は低いかもしれません。それでも家族全員、特に母は「娘は生きて必ず帰ってくる」という希望を持ち続けて、彼女の帰りを毎日待っています。その希望がどんなに母を強くしていることか！

神の導きと、安全でもっと良い人生を送りたいという希望を持って、夫と私はカバン2つを手にし祖国を去ることにしました。新しい国ではゼロからのスタートです。掃除や工事現場などの仕事から始まり、今まで想像もしなかった辛い経験をたくさんしました。しかし悪いことばかりではありません。その地で信頼できる素晴らしい人々との出会いがあり、友人も多くできました。ところが悲しいことに、この国での難民申請は却下され、2ヶ月の間に他国に出国しなければな

りませんでした。その知らせは私たちをどん底に落としました。この時、私たちには幼い長女がいたのです。どこか直ぐに家族全員が安全に暮らせる国を探さなければ・・・それがカナダでした。4つのカバンと3歳の娘を連れてこの国に到着した時、再び神の導きを信じ、今度こそという希望をもっていました。そして幸運がやっと訪れました。無事申請が受理され、ありがたい事にこの時第二子にも恵まれました。夫は高校と短大を卒業したのち就職し、私は現在 ESL クラスを受講しています。いつでも神が私たちに希望を与え、どんな境遇でも強くなるよう導いてくれたことに感謝しています。時折、頼る者がいない状況で祖国に残してきた家族や親戚を思うと悲しくなりますが、それでも新しい人間関係を築きながら今頑張っています。



ジュゼイ



希望を持つこと Maryan - イラン

理不尽な状況を変える事ができない時、希望を持つことは我々に耐える力を与えてくれます。母親として、私の最大の願いは息子たちの人生における成功。しかし最も重要なことは、人間として彼らの能力が十分発揮でき、個人の信念や宗教が批判されない安全で自由な、そして活気に満ちた環境が与えられることだと思います。

私の祖国イランにおいて、現在、政府軍に捕らえられている多くのイラン人が無事釈放され、また中東における各国の人々が、イスラム過激派グループによる抗争に巻き込まれないことを願って止みません。息子たちには、イランの人々が30年以上苦しんでいる過酷な状況を絶対に経験して欲しくないという気持ちと、新しい人生を与えてやりたいという希望を持って、私たちはカナダに来たのです。



アリアン

神様からの贈り物 Dona - スリランカ



「なぜカナダに来たの？」と聞かれたら、「私の愛する娘のためです」と答えます。私たちは娘により良い人生を与えたいという希望を持っていたのです。

私の娘は、遺伝子の染色体異常により肉体的、精神的に合併症を持って生まれました。生後2、3日には、心臓に2つ穴があると告げられ、また、彼女の脚には細菌感染による腫れ物もありました。脚の腫れ物は簡単な手術で直ぐに除去できましたが、心臓の手術は彼女の成長を待ってからということになりました。ところが、彼女が2歳の時、心臓の穴が自然に閉じるという奇跡が起きました。しかし、成長は他の赤ちゃんと比べるとかなり遅れ、首がすわるのも遅く、3歳でも歩くことができませんでした。医者は生後直ぐに行なった、脚の腫れ物除去の手術に何らかのミスがあったと報告してきました。その結果、矯正手術がされ、娘は3ヶ月もの間、下半身を石膏で固められてベッドに寝たきりになりましたが、驚いたことに彼女はその後びっこを引きながらも歩き始めたのです。しかし、医師からは生涯、治療を続けなければならないと告げられました。同時に、その頃彼女の両目に白内障が発症しました。度重なる不幸に打ちのめされましたが、この時、私たちは発展国に移住することを決めたのです。

2007年カナダ、娘の初登校の日のことははっきりと覚えています。特別な車と運転手、そして訓練された教師が娘のために用意され、また、教育委員会によって娘に合わせた特別カリキュラムが組まれました。カナダでの手厚い福祉サービスは、娘により良い人生を与えたいという私たちの夢を叶えてくれたのです。2、3ヶ月後、彼女の右目、その1ヵ月後に左目の手術をしました。明るい将来が見えた矢先、左目の手術が成功しなかったという、またもや不幸が私たちを襲いました。でも負けてはいられません。次に私たちは、より良い治療を受けるため、世界でも有名な「Sick Kids Hospital」のあるトロントに移ることにしました。そこで目と脚の治療を受けていますが、左目の視力は悪くなるばかりか、今は残る右目についても心配があるとのこと。今年中に背骨と脊髄の負担を減らすため脚の再手術を受ける予定です。

私たちは娘の人生に対し長期の目標を立てました。たとえどんな状態になろうとも、最新医療技術の恩恵で、彼女がもっと自立できるようになるよう訓練していくこと。現在、日常生活での身体行動はかなり改善してきました。また、家族が一丸となって娘を支える姿勢は、他の2人の子供に人間としてすばらしい経験を与えていると思います。

一日一日が奇跡であり、生きる喜びと家族の絆、そして多くの希望を与えてくれる娘。今、私たちは、この神様からの特別な贈り物に感謝しています。



未来へのHOPE ～

Parenting and Family Literacy Centres By 大嶋あきこ

カナダの経済中心地トロント市、市内のはずれにある住宅地を歩いて「最近どお？」「日本のご両親はいかが？」と顔見知りから声を掛けてもらうだけで、気持ちがほっこりする瞬間があります。5年前の初夏、1歳になる長男をつれて引っ越してきた近所の小学校の窓に「Parenting and Family Literacy Centre」のあまり目立たないサインを見つけた日から私と息子の毎日が明るくなり始めました。

市立小学校の一室を間借りするこの Parenting and Family Literacy Centre は、日本で言う子育て支援センターといったところでしょうか。もともとは、Toronto District School Board（トロント市教育委員会）が就学前の乳幼児（0-6歳）に向けて作ったもので、学校に行き始める子供たちがスムーズに団体生活、社会生活を始め学校生活に備える為に作られ、このシステムが大成功し、トロント市内で70以上の小学校にこのセンターが入っています。近隣の市やオンタリオ州からも注目を浴びるようになり、州も支援するようになりました。

このセンターが成功している理由は、無料で予約の必要がなく、開いている時間であれば好きな時間に行ける。本の読み聞かせや歌を歌うサークルタイム、おもちゃも沢山あり、クラフトや季節の行事も参加できる。親や引率者が率先して野菜やフルーツ、チーズ、クラッカーなどを切ったり配る必要はあるものの、スナックが提供される。子育てに関するいろいろな情報が得られる。勿論、地域の子供が集まるのでお友達が作れる等様々。

強制ではないので、たまにしか訪れない人もいますが、私は息子を連れてこのセンターに通うことを日課にしています。前述の理由は勿論のこと、学校内に設置されているので、カナダの学校の日常や常識などを知る機会を得られる事が私にとっては最大の魅力です。子供は遊びを通して他人との接し方を学び、親もトロントの学校について知る最高の場所です。お陰で長男は幼児部に通うようになった初日から親に手も振らずに教室に駆け込むほど学校生活に馴染み、次男も来年の入学が待てない様子。私も日本では知り得なかったであろう沢山の事を学び続けています。トロントはさすが、移民が国家政策の大切な一部である国の経済中心地、いろいろな国からいろいろな生活習慣を持った人たちが移り住んできます。紛争や自然災害を目の当たりにした人も少なくありません。そのせいか、他国で起こっている事に敏感に反応できる人の多さもその一つです。

昨年の東北大震災直後、「日本は大丈夫なの？ご家族は？」一番最初に早朝、道端で声を掛けてくれたのも以前そこで出会った名前も知らないギリシャ出身のお母さんでした。名前も覚えていない人が気に掛けてくれる事に驚きと感謝の気持ちが膨れ上がりました。この他にも声を掛けてもらうことで、不安を声に出して表現する機会を沢山貰いました。震災から一年程経ったある日、あるお父さんが「復興には大分時間がかかるだろうが、それができる国があるとしたら先ずは日本だよ。日本人には助け合い、団結する強い精神力があるから。」と言ってくれました。目頭が熱くなり、心が柔らかくなる瞬間でした。他人と接するだけで毎日が、そしてこれからが変わっていくのかもしれないと改めて感じています。

